

## 御冠船踊りの面影

—二才の踊る女踊りと二才踊り—

沖縄県立芸術大学 板谷 徹

本日の舞台は、レクチャーデモンストレーションのかたちで御冠船踊り（ウカンシンウドウイ）がいったいどんなものであったのかを探る企画です。

沖縄本島北部には今も約90ヶ所に村踊りと呼ばれる芸能が行われています。これに類する芸能は本島全域に及びますがその名称はまちまちで、村踊りはおもに名護市周辺での呼び名です。しかしこの芸能が地方下りをした士族の教授による御冠船踊りに発し、その後、芝居者や舞踊家に指導を仰いでいることから、御冠船踊りが地方の村々に伝えられたという意味で、その全体を村踊りと呼んでも差し支えないでしょう。

名護市幸喜に踊りを伝えたのは恩河親雲上といわれ、恩河親雲上はその後、移住先の大浦やその周辺でも教えています。踊りを伝えた士族の素性が明確な幸喜のほかにも、前に述べた本島北部の村踊り約90ヶ所の四分の一程には、士族から教わったという伝承があります。

御冠船踊りには、この村踊りに伝えられた流れと現在の琉球舞踊と呼ばれる流れのふたつがあり、どちらがより御冠船踊りのもとのかたちを残しているかといえば、前者の村踊りです。琉球舞踊が御冠船踊りを近代的に洗練すればするほど、昔風の村踊りは泥臭い素人芸とみなされ、村踊りの方でも自信を失って琉球舞踊に近付きつつある、というのが現状です。かつては現在の琉球舞踊を「芝居風」と呼び、村踊りこそ御冠船踊りだとする自負は、太平洋戦争後次第に希薄になりました。

恩納村北部の各字では、村踊りを二才中（ニーセージュウ）という組織で行っています。かつてはどの村にもあった組織であるらしいのですが、明治期の国策による青年団運動によって失われていきました。二才中の消滅した地域の村踊りは、字（近世村、現在の行政区）の行事となり、本来の踊り手である青壮年に婦人会、老人会が加わり、御冠船踊り系統の演目をしっかりと伝承する村踊り以外は、芸の質が次第に変化します。そうしたなかで、現在も二才中の組織で村踊りを行う恩納村北部の、女踊りも青年が踊る恩納、瀬良垣、名嘉真には、首里王府時代の御冠船踊りが二才によって担われていたかたちをそのまま残しています。そのことを知っていただくことが本日の舞台の趣旨です。

今日の琉球舞踊は、その方向をなお模索しているといえましょう。その一例として志田真木さんに「諸屯」を踊っていただきます。

琉球舞踊が御冠船踊りに戻る必要はないとしても、御冠船踊りを踏まえて新しい方向を選択することは必要でしょう。

村踊りから想像される御冠船踊りを女踊りについでみれば、まず基本的な構えが琉球舞踊とは異なります。上体をまっすぐに立てて深く腰を落とし、歩みも現在の摺り足ではなく、爪先をうちに巻き込むようにします。向きを変える場合も、現在はガマクを入れて足を送る〈小廻り〉ですが、御冠船踊りでは足を捻って〈向き直り〉ます。明治以降の芝居で表情をつけるためにガマクを入れ、面をかける技法を取り入れた結果の変化です。したがって琉球舞踊の基本立ちである〈女立ち〉も、腰を落して向きを変えるという、現在の〈女立ち〉とは随分異なる技法となります。

このほかにも、女踊りの構成の基本である出羽、中踊り、入羽の役割も再考を迫られています。しかし御冠船踊りと琉球舞踊のなよりの相違は、そこに作り出される世界の質の違いにあります。女性が男の兄弟の守り神であるという《おなり神信仰》に基づいていた御冠船踊りの女踊りの世界は、近代に個の世界に読み替えられ、「連れ立つ女たちの風景」がひとりの女性の心情の世界へと転じていきます。この世界の質の違いを本日の舞台でご理解いただきたいと思います。

### 【プログラム】

恩納村瀬良垣

女踊り「女踊」

二才踊り「高平良万才」

恩納村名嘉真

女踊り「白瀬節」

二才踊り「下り口説」

恩納村恩納

女踊り「金武節恩納節」

二才踊り「笠口説」

女踊り「諸屯」

志田真木（志扇雅び会）